

中学・高等学校における弱視生徒参加の体育

井上 幹智 (筑波大学)

1. 目的

弱視の生徒が体育授業に十分参加できていないことが報告されている(木村 2015, ほか)。そこで通常校に在籍していた弱視者を対象とし通常校での体育授業で生じた困り感を見つけ出し、弱視の生徒が体育授業に十分参加できない要因を明らかにする。そして弱視の生徒が持っている能力を発揮できる授業を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。

2. 研究方法

対象者: 中学および高等学校に在籍経験のある弱視者3名とした。

調査方法: 対象者ごとに約50分の半構造化面接を実施した。質問項目として、体育に関して・教師に関して・仲間に関しての3項目を設定した。

分析方法: グラウンデッド・セオリー論(木下 2014)をもとに質的分析を行った。質問項目ごとに1つのデータとし、それらのデータをコーディングした。さらにコーディングしたものを類似する意味ごとにまとめ、項目ごとにカテゴリー化を行った。また対象者別に、各項目とそれに影響を与える要因との関係性を関係図にまとめた。

3. 結果と考察

体育に関しての項目では6、教師に関しての項目では3、仲間に関する項目では2つの大カテゴリーに分類された(表1)。具体例として、実施では「教師から授業の場に来ず保健室にいて欲しい」との指示があったこと、また仲間に抱く心理では「仲間からの偏見や周囲からの視線が気になった」との回答があった。そのため実施と教師の障害理解との関係性や、仲間に抱く心理と障害受容との関係性が明らかとなった。

共通の課題としては、教師の障害に関する知識の不足および授業における工夫が不十分という点が挙げられる。また弱視生徒は健常生徒に対し、自らの障害の程度を伝えることに抵抗があることが明らかとなった。また、個別の課題としては、教師との関係性や話し合いの場の有無が、生徒の困り感に大き

く影響を与えていることが明らかとなり、教師からの声かけやコミュニケーションによる信頼関係の構築が考えられた。

4. 結論

以上のことから、体育に関しては、見え方や運動特性による活動量の少なさや授業形態に関する課題が明らかとなった。また教師に関しては、教師の障害理解やアダプテッド体育(APE)の視点からの授業改善が不十分と弱視の生徒が感じている現状が明らかとなった。最後に仲間に関しては、仲間に対して自らの障害を打ち明けることができないといった心理的側面で困難を抱えていることが明らかとなった。これらに対応した授業の工夫や雰囲気づくりが教師には求められると考えられた。

表1 カテゴリー別の回答一覧

調査項目	大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
体育に関して	実施		自発的な選択 強制
	参加条件	ボールサイズと見え方	困難
		運動特性	可能 種目
	見学時の活動	場所 行動	授業の場 別室
	体育の成績	納得あり 納得なし	事前に決定 自己評価との合致 ニーズが満たされていない
	体育場面での支援		教師の支援 場や用具の支援 仲間の支援
体育への動機	肯定的 否定的	種目 仲間	
教師に関して	教師の障害理解の有無	理解あり 理解なし	双方向の関係性 生徒からの一方通行 両者からアプローチ無 教師間での連携不足
	教員に対する意識		本ガイズ ボジティブ
仲間に関して	仲間に抱く心理		苦悩 期待
	体育場面での活動		協働 個

5. 主な参考文献

- 1) 木村敬一(2015)インクルーシブ教育における視覚障害生徒のスポーツ活動の現場に関する研究-視覚障害生徒自身が持つスポーツに対する考えから-。アダプテッド体育・スポーツ学研究, 1:22-25.
- 2) 木下康仁(2014)グラウンデッド・セオリー論. 弘文堂.